

愛媛・平田七反地遺跡 ひらたしちたんじ

1 所在地 愛媛県松山市平田町地内

2 調査期間 一九九七年(平9) 四月～一九九八年三月

3 発掘機関 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

4 調査担当者 善永光一・野本 健

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 弥生時代終末期～古墳時代後期、中世(二世紀～一六世紀)

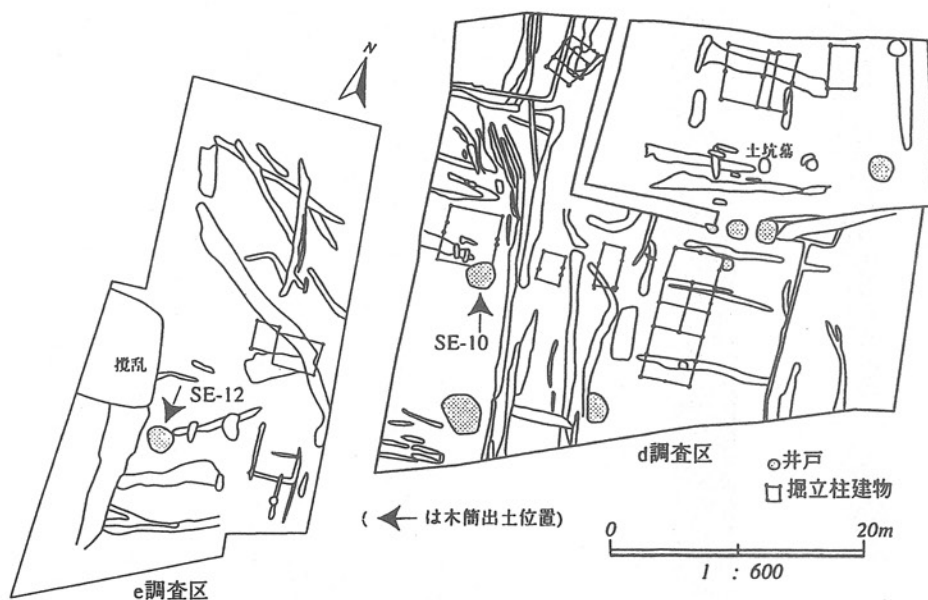
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(三津浜・松山北部)

平田七反地遺跡は松山市の北辺、瀬戸内海に近い標高八mの沖積地上に位置する。現在は大内谷と呼ばれる谷の谷口集落である。遺跡は背後の約四〇mの小起伏丘陵と、前方西側の堀江地溝帯と呼ばれる旧石手川によって形成された沖積低地に囲まれている。

遺跡のある和気・堀江地



遺構配置図 (一部古墳時代の遺構を含む)

区は、縄文時代晩期を中心とした船ヶ谷遺跡・大洲遺跡、弥生時代前期の三光遺跡・堀江遺跡など、古くから生活痕跡の残るところである。古代においては、和気郡に属するようになる。中世には、河野氏の家臣である大内氏の支配下にあり、平田七反地遺跡の北側丘陵上には大内氏の居城である大内城が存在する。

今回、一般国道一九六号松山・北条バイパス建設工事に伴い、記録保存を目的とした発掘調査を、一九九六年四月から一九九八年三月まで実施した。調査はb～eの調査区を設定して行ない、総面積は七九六〇㎡である。調査の結果、弥生時代終末期～古墳時代後期までの集落、中世（二世紀～一六世紀）の集落が検出され、長期間営まれた生活痕跡を確認することができた。特に中世の集落からは、溝に囲まれた多数の掘立柱建物や井戸が検出された。

木簡は一九九七年度の調査区であるd・e区の二カ所の井戸より一点ずつ検出した。d区の井戸一〇は一辺七五cmの方形縦板組横棧型の井戸で、掘形径二・三mを測る。井筒は径四〇cm深さ二五cmの曲物である。井戸内より一三世紀初頭の瓦器椀が出土している。

e区の井戸一二は石組みの井戸で、掘形径二・〇m深さ一・二mを測り、井筒は無く、石のみで組まれたものである。井戸の裏込めから一五世紀後半の備前焼の甕が出土している。

8 木簡の釈文・内容

井戸一〇

(1) [□□]

302×(38)×5 081

井戸一二

(2) 「□ 永□七年 □□□□□□□□」

281×27×3 081

(1)は短冊型の木簡である。左右両辺は割れている。左上隅に二文字認められるが、判読はできない。右上に木の皮による綴じ紐が付いている。材質は檜。

(2)は木簡の左側が欠損している。二行目の三文字目は「賣」だが、これは文字の旁部分のみが残っていると考えられる。材質は習檜（あすなろ）である。（西川真美）



(2)

(1)